発言

豊橋技術科学大学
副学長
中野　裕美

多様性と調和

東京２０２０オリンピック・パラリンピックが1年遅れで無事開催され、私はたくさんの感動と興奮の時間を過ごしました。オリンピックの大会理念の柱に「多様性と調和」が掲げられました。「人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治、障がいの有無など、あらゆる面での違いを肯定し、自然に受け入れ、互いに認め合うことで社会は進歩する」と明記されています。大会期間中には、「多様性」という言葉が何度も聞かれました。日本が世界から注目された期間でもあり、私自身も多様性について考える良い機会となりました。

多様性の必要性

多様性（ダイバーシティ）の必要性について、考えてみたいと思います。多様性とは、さまざまな異なる要素が存在することであり、民族、人材、文化、アイデア、性、生き方、働き方など幅広い分野に関わっています。「多様な人材」の中には、多様な民族、文化、性、考え、働き方、生き方がすべて含まれます。多様な人材を組織が採用したいと思う理由は、独創的、創造的思考や活動、新たな発見・発明が、多様な個性により生まれるからです。これにより、職場が活性化し、業績を上げることができるのです。

しかし、組織の中に、違う文化や考え方を持った人を受け入れるのは、容易ではない場合もあります。そこで必要になるのは、「寛容度（トレランス）」といわれています。「違いを認め、生かし、高めあう」これがダイバーシティマネジメントの基本の考え方です。

世界を変えた男

組織を活性化させるために異文化を入れ、多くの困難を乗り越えた事例として、メジャーリーグに初めて黒人選手が登録された時の実話に基づいた映画をご紹介します。「42～世界を変えた男～」です。ご覧になった方もいると思います。１９４６年のアメリカでは、メジャーリーグ16球団の登録選手４００人は、すべて白人でした。その時代に「黒人選手をメジャーリーグでプレーさせることは、法で禁じられてはいない」と、1人の黒人選手を登録するために立ち上がった人がいました。それに対し「慣習がある。慣習に背けば社会から排斥される」という強い反対意見が出ました。達成するためには、多くの壁や心の葛藤があり、その頃のアメリカ社会の人種問題や、深刻な差別を知ることができます。

その黒人選手は「42」の背番号をもらい、活躍するのですが、今でも4月15日は、すべての球団選手が、ジャッキー・ロビンソン選手の「42」の背番号をつけてプレーし、彼の偉業をたたえるのだそうです。印象的な会話に、どんなに差別的な態度や暴言を吐かれても「やり返す勇気のない選手になれと言うのか？」と黒人選手が言う場面で、「やり返さない勇気を持つ選手になれ」と諭すのです。

ジャッキー・ロビンソン選手は、次世代の黒人選手につなぐため、紳士的に、そして偉大な成果を残す努力をしました。前例にないことをやる勇気と、それに応えようと努力をする姿には涙が出ました。このように、偉大な先駆者がいて、アメリカの野球がより強くなったのだと思います。

（２面へ続く）

発　言

豊橋技術科学大学
副　学　長
中野　裕美

（1面から続く）

多様性と調和

びをするために、園庭に出る準備を園児たちがしている中、女児がやりたくないと言っていました。先生は「OK。好きなことをやっていいよ」と言い、彼女は部屋に残ってお絵描きを始めました。

おやつの時間に、保護者からの差し入れのピザが配られることになりました。先生が息子に「食べる?」と聞いたのですが、英語の分からない息子は、首を横に振ってしまいました。先生は、「OK。」と言って、息子にはピザを配りませんでした。息子は少し悲しそうな顔をしていましたので、置いてくれればいいのにと、親心で思ったものです。

しかし、後で冷静に考えると、文化の違う園児がたくさん来ていますので、ベジタリアンやイスラム教など、みんなと同じ食材を食べられない人もいます。そのため、先生は子どもの意思を確認しているのだと気づきました。多様な人種が住むアメリカでは、しっかり「NO」と言えるように教育をしているのではないでしょうか。みんなと一緒に行動しなくても良いというのも、個性を伸ばすことを優先しているようにも感じました。アメリカの保育園での一場面でしたが、多様な人種が暮らすアメリカでの生き方を、小さい頃から教えているのだと感心しました。

アメリカの保育園

このように、多様な人材の活躍により、組織は活性化します。しかし、違いを受け入れることは、やはり容易ではないこともあります。それは私の幼い頃、「みんなと同じ」が基本で、保育園や小学校を過ごしたからかもしれません。

そこで、アメリカの保育園の話をしたいと思います。今から約20年前ですが、息子が4歳の時に、家庭の事情で1カ月、アメリカの保育園に入園したことがあります。保育園の月間の目標が「NOと言える自分になろう」でした。ある日、保育園を見学していると、フェイスペインティングの遊びをするために、園庭に出る準備を園児たちがしている中、女児がやりたくないと言っていました。先生は「OK。好きなことをやっていいよ」と言い、彼女は部屋に残ってお絵描きを始めました。

おやつの時間に、保護者からの差し入れのピザが配られることになりました。先生が息子に「食べる?」と聞いたのですが、英語の分からない息子は、首を横に振ってしまいました。先生は、「OK。」と言って、息子にはピザを配りませんでした。息子は少し悲しそうな顔をしていましたので、置いてくれればいいのにと、親心で思ったものです。

しかし、後で冷静に考えると、文化の違う園児がたくさん来ていますので、ベジタリアンやイスラム教など、みんなと同じ食材を食べられない人もいます。そのため、先生は子どもの意思を確認しているのだと気づきました。多様な人種が住むアメリカでは、しっかり「NO」と言えるように教育をしているのではないでしょうか。みんなと一緒に行動しなくても良いというのも、個性を伸ばすことを優先しているようにも感じました。アメリカの保育園での一場面でしたが、多様な人種が暮らすアメリカでの生き方を、小さい頃から教えているのだと感心しました。

文化の違い

一方の日本では、私の小さい頃は、はっきり「NO」を言うのを好まなかったような気がします。母親は「そういう時は、少しぼかして言う方が良い」と、幼い私に教えたように思います。故郷の福井を離れ、大学時代を豊橋で過ごした後、京都の企業に就職しました。ある時、友人をテニスに誘った際に「ありがとう」と言われたら、本当に行くかどうかはわからないから、と言われました。誘ったことにお礼を言っているだけで、返事はまだしていないというのです。本当に行きたければ「何時に集合するの?」と聞くそうで、はっきり断らないのが京都風なのだと、友人が教えてくれました。でも、こういうグレーな答え方は、ビジネスをする上では困りますよね。

アメリカよりずっと小さい日本でも、地域により文化の違いが存在します。方言や食文化の違い、雪国と温暖な地域での生活環境の差、そういう違いは、国を超えればもっと増大します。これからのグローバル時代に生きるためには、いろんな違いを受け入れ、認める寛容度を身に着けようと思う日々です。

多様な性

次に、多様な性について考えてみたいと思います。最近では、いろんな自治体が、LGBT（性的指向のLesbian、Gay、Bisexualと、性自認のTransgender）に配慮した取り組みをしています。ここでは、トランスジェンダーについて、少しご紹介したいと思います。

身体の性と心の性が一致せず、自分自身に違和感を持たれている方がいます。2001年のドラマ「金八先生」で、上戸彩さんがスカートをはけない女子中学生を演じました。当時の私は、LGBTにあまり理解がなく、制服に違和感があり、通いにくいと感じている人がいることを初めて知りました。

私の通った小中学校は、雪国ということもあり、冬期にはスラックスをはいている女子も多く「寒いのに、スカートでなくてはいけないというルールはおかしい」と、別の意味での違和感がありました。近年では、心の多様性を認める取り組みとして、ジェンダーレス制服が急増しており、男女問わずに制服を選べる時代になってきました。

また、いろいろな施設で「みんなのトイレ」が整備されています。トランスジェンダーの方の手記を読むと、コンビニのように、男女に分かれていないトイレが一番入りやすいとのことでした。

豊橋技術科学大学の「みんなのトイレ」の表示板

ダイバーシティ推進

最後に、本学でのダイバーシティに関する取り組みをご紹介したいと思います。本学では6月の「男女共同参画週間（内閣府）」に合わせ、ダイバーシティに関する川柳コンテストを開催しています。今年の入賞作品の中に、「僕の普通、あの子の普通と違うかも」という作品がありました。今年は多くの応募があり、英語の川柳も登場しました。学内から「なぜ川柳を公募するのですか?」という質問もあります。川柳を考える時間は、ダイバーシティを考える時間であり、世の中の動向を調べる機会にもなってほしいという思いがあります。

多様性を理解するためには、思い込みや偏見（アンコンシャスバイアス）に気づき、なくす必要もあります。多様性をより理解するため、ダイバーシティ推進本部では、「多様性への理解」という冊子を作成しています。2月には完成する予定で、学内外に配布しますので、ご興味がある方は、本学にお問い合わせください。

今回はここで筆をおきます。

なかの・ひろみ
豊橋技術科学大学副学長・教授
福井県鯖江市出身、豊橋技術科学大学工学研究科博士前期課程修了（博士〈工学〉）。村田製作所、龍谷大学を経て、2009年豊橋技術科学大学准教授として着任。12年から教育研究基盤センター教授。日本学術会議連携会員（23～24期、25～26期）、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構客員教授。専門は、無機材料、材料工学。